木葉形薄型尖頭器の新例

－その分布の広がり－

橋　本　勝　雄

はじめに

木葉形薄型尖頭器（以下「薄型尖頭器」という）は、縄文時代草創期に忽然と登場し、当該期にあって形態的にひときわ異彩を放っている。その遺跡分布は関東を中心として本州全域に及ぶが、特に下総台地が稠密で約半数を占める。すなわち千葉県に馴染みの深い石器なのである。

薄型尖頭器については、まず信藤祐仁が「局部磨製尖頭器」の一種として千葉県東三里塚吉野台（空港№３）遺跡、東京都多摩ニュータウン№860遺跡及び埼玉県西谷遺跡を紹介した（信藤1989）。

信藤に続いて前原豊は、前橋市内の有舌尖頭器の中に新たな資料を見出し、新潟県壬遺跡の出土資料にちなみ、これを「壬形有舌尖頭器」と呼んだ（前原1991）。また帰属時期を、小型化を論拠として芹沢長介による有舌尖頭器編年の最終末に位置づけた（芹沢1966）。

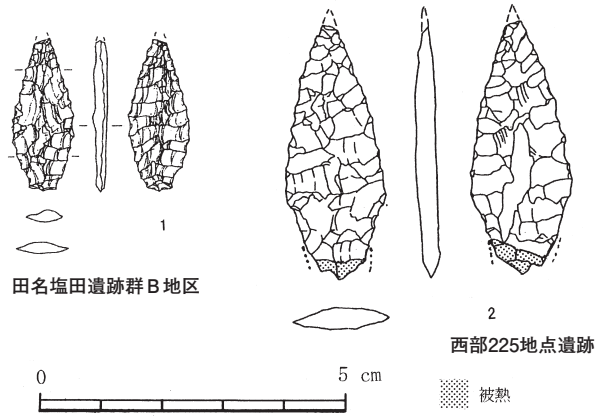
次いで、永塚俊司は、千葉県天神峰最上（空港№64）遺跡の報文中で、薄手、左右対称、凹基、磨製及び鋸歯状縁の５つの技術要素を挙げるとともに、県内の類例として、東三里塚吉野台（空港№３）遺跡をはじめ５遺跡を挙げた（永塚2001）。

このような一連の見解を受けて、筆者は、草創期における局部磨製石鏃の研究の一環として、その特質と意義を論じ、特異な形状から当該資料を「木葉形薄型尖頭器」と呼んだ（橋本2008ａ・ｂ）。

さらに、その後類例として島根県松江市宮ノ前遺跡（柳浦ほか2006）と秋田県横手市岩瀬遺跡（利部・谷地1996、利部1998）を見出し、見直しを図った。その結果、分布域の拡大はもとより、その帰属時期が、寒冷な新ドリアス期（縄文時代草創期後半）に局限される可能性が高まった（橋本2013）。

今回紹介する資料は、新たに確認した追加資料であり、後述するように、これにより太平洋側の分布域がさらに拡大することとなった。

ついては，小論では、当該資料の位置づけを検討し、併せて前稿の不足を補いたい。



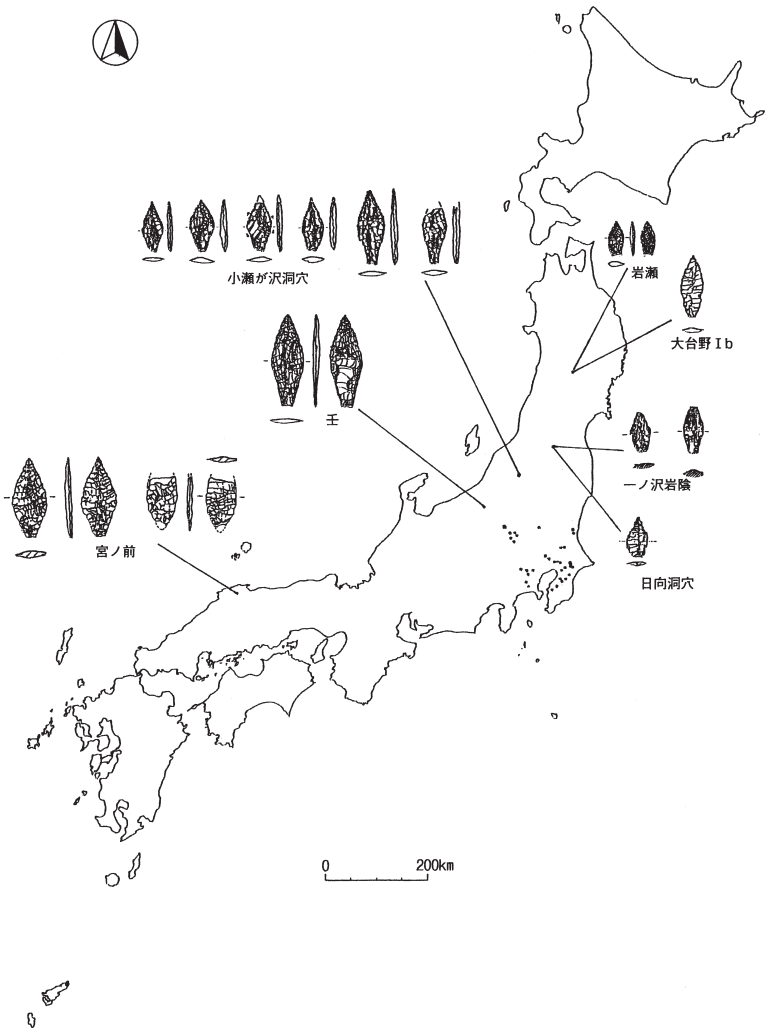
第１図　木葉形薄型尖頭器の新例

１　追加資料の紹介（第１図～第３図）

（１）相模原市田名塩田遺跡群Ｂ地区（第１図１）

遺跡は，相模川の東岸の相模野台地上に位置し、標高は約57ｍ、相模川の沖積面との比高は約17ｍである。田名塩田遺跡群には３か所の遺跡（Ａ～Ｃ地区）が存在するが、このうちＢ地区は最も東側に位置する。ここでは旧石器時代、縄文時代、古墳時代後期、中・近世の遺構・遺物がみられたが、当該資料は縄文時代の包含層から出土した。

大きさは，長さ2.4㎝，幅1.0㎝，厚さ0.2㎝、重さ0.4ｇを測り小型である。先端部には折れが見られる。基部の平面形は平基であるが、凹基を意図した長軸方向の剥離面（抉り）が２面観察された。石材には褐色系の東北頁岩が使用されている。表裏が押圧剥離により入念に加工されており、特に右面は細長く平坦な剥離面が並行している。打製であり研磨の痕跡はない。



第２図　木葉形薄型尖頭器関連遺跡分布図（全体） 橋本2013を一部改変

（２）藤沢市西部225地点遺跡（第１図２）

本遺跡は、相模野台地の南端部、東に小糸川（引地川の支流）を望む標高約37ｍの平坦な台地上に位置する。縄文時代の石器は９点出土している。内訳は、石槍１点のほか、打製石斧３点、磨製石斧１点、石錘２点、磨石類１点、及び二次加工ある剥片１点となっている。いずれも遺構外から出土し、原位置をとどめていない。

このうち該当資料は，「石槍」１点である（報文：第89図１）。大きさは，長さ4.1㎝，幅1.7㎝，厚さ0.3㎝で比較的大型である。ただし、あくまでも現状であり、先端部には耕作等によるガジリ、基部には被熱による損傷が見受けられる。石材は、１と同じ褐色系の東北頁岩である。表裏に平坦な押圧剥離がみられる。研磨の痕跡はない。

２　薄型尖頭器の基本属性

次に、これまでに把握した薄型尖頭器の基本属性を掲げる。両者の相互比較によって、追加資料の位置づけが自ずと鮮明になろう。

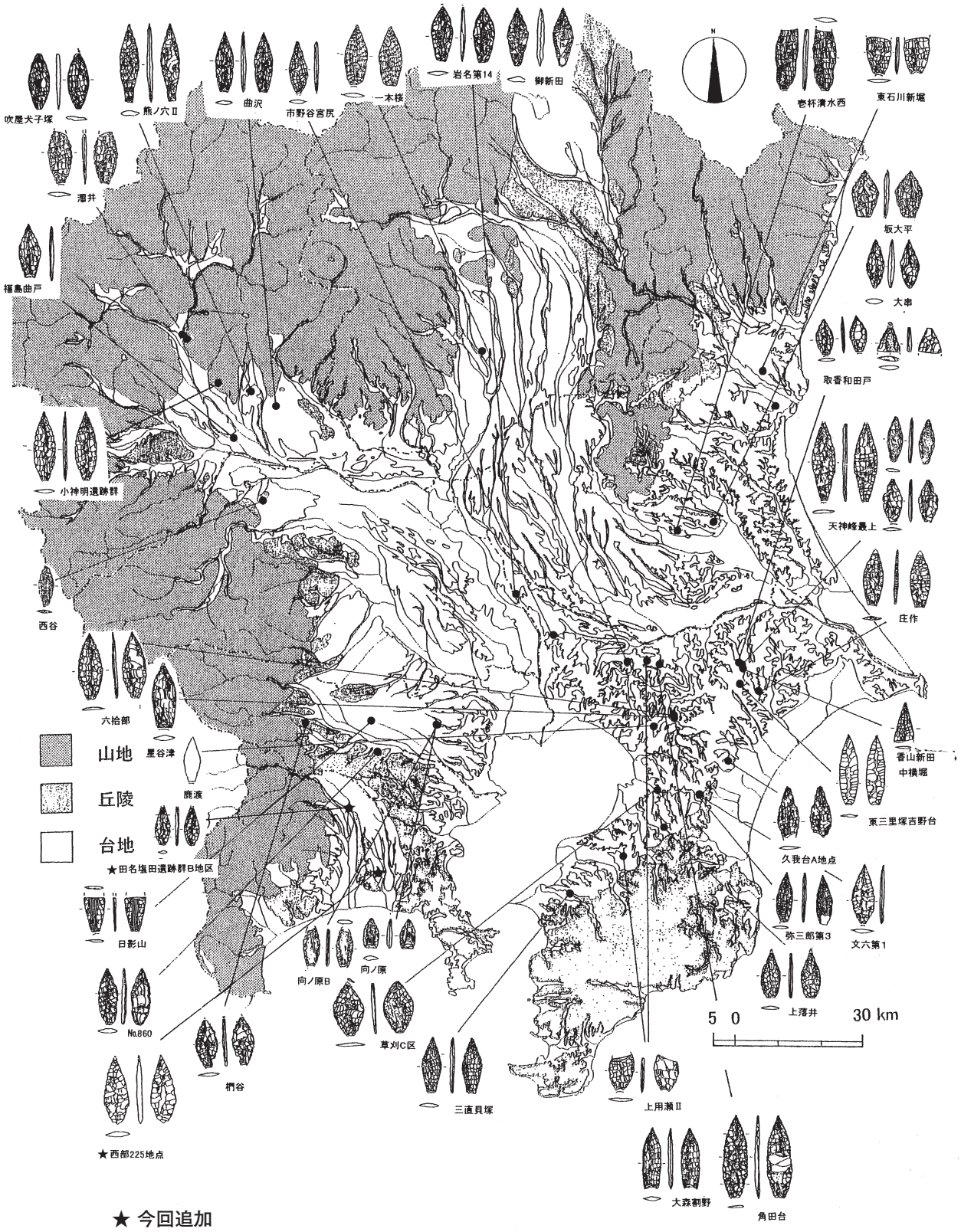
規　　格　薄型尖頭器の大きさは、長さ2.4㎝、幅1.0㎝～1.9㎝、厚さ0.2㎝～0.4㎝、重さ0.6g～2.5gとなっている。長さは３㎝～４㎝が平均サイズと推定される。これに対して、幅は1.5㎝、厚さは0.2㎝に集中し、器体の薄さが際立っている。

形　　態　最大幅の位置によって多少の形態差はあるが、基本的には、全体の形状は左右対称の木葉形ないしは柳葉形を呈し、中央部に最大幅がある。断面形は薄手扁平である。基部の形状は、凹基が約70％、平基30％となっており、凹基が大半を占めている。

製作技術　第一次剥離面の観察から、薄手で扁平な横長剥片であったものと推察される。押圧剥離により整形されており、器面には幅が狭く平坦で奥深い剥離面が並行し、縁辺部は尖鋭で鋸歯状を呈している。

研　　磨　押圧剥離による器体の整形後、しばしば研磨により器面中央部の剥離面の高まり（稜）が除去され、平坦に整形されている。その頻度は、約80％である。通常は両面磨製であり、見立溜井遺跡が唯一片面となっている。このような研磨の存在から、薄さへの強いこだわりが窺われる。まさに薄さの極致といえよう。ただし、研磨の有無による厚さの差異は特に認められない。このことはとりもなおさず整形後の厚さに応じて研磨が行使されたことを物語っていよう。

石　　材　薄型尖頭器を決定づける特徴の一つに岩種の偏りがある。主体は東北頁岩であり、全体の約70％を占めている。その他、チャート、凝灰岩があるが補足的である。薄型尖頭器は極限までに薄く加工され、精緻な加工が施されている。おそらく、そのためには、東北頁岩のような強靭で薄い加工に堪える岩種の選択が不可欠だったのであろう。ちなみに関東の資料（42点）の岩種の内訳は、東北頁岩29点（白色系９点、褐



第３図　木葉形薄型尖頭器関連遺跡分布図（関東）　橋本2013を一部改変

色系16点、灰色系４点)、チャート９点、凝灰岩３点、不明１点となっている。

３　追加資料の意義と評価（第２図・第３図）

前節の基本属性を踏まえれば、今回の追加資料は、研磨こそ施されていないものの、大きさ、形態、製作技術、及び石材等の諸属性は、薄型尖頭器の範疇にあることは明らかである。

さて、冒頭でも述べたように、薄型尖頭器は、東北地方から中国地方に分布し、特に関東地方で頻出している。これまで関東では、唯一、神奈川県が未発見であったが、これで関東一円に分布することとなった。関東全体では都合40遺跡・45点を数える。

このような遺跡数の多寡から、薄型尖頭器の存続期間は極めて短期間であることが予想される。おそらく、突如出現し、石鏃の改良の歴史の中で急速に消滅したのであろう。

なお、日本海側の島根県宮ノ前遺跡と同様に、今回の田名塩田遺跡群や西部225地点遺跡の周辺には勝坂遺跡及び長堀北遺跡などの北方系細石刃石器群（「在地型」）が見られ、それぞれ日本海側と太平洋側の南限となっている（橋本2012)。このことは、北方系と薄型尖頭器の時期には、時を超えて互いの生活環境が類似していたことを物語っていよう。

おわりに

新資料の追加とともに、研究の現状について紹介した。今のところ薄型尖頭器は、縄文時代の石器研究の遅れもあって、数量的に零細である。しかしながら、一旦、認知されるや、雨後の筍のごとく続々と資料が登場するのが世の習いである。研究の深化に向けて、資料の蓄積を切望してやまない。

謝　辞

本論を草するにあたって、以下の方々に協力いただきました。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

相模原市立博物館、藤沢市教育委員会、島立桂、山岡磨由子

引用参考文献（年代順）

芹沢長介　1966「新潟県中林遺跡における有舌尖頭器の研究」『東北大学文学部日本文化研究所研究報告』第２集　pp.1-67

信藤祐仁　1989「局部磨製石鏃研究の現状と課題」『山梨考古学論集』２　pp.67-94　山梨県考古学会

前原豊　1991「前橋市内出土の有舌尖頭器について」『芳賀団地遺跡群　第４巻　芳賀西部団地遺跡』pp.264-269　前橋市教育委員会

寺田兼方・澤田大多郎　1991『藤沢市西部土地開発区域内埋蔵文化財発掘調査報告書　西部209地点遺跡・西部215地点遺跡・西部225地点遺跡』　pp.105-128　藤沢市西部土地開発区域内埋蔵文化財発掘調査団

利部修・谷地薫　1996『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸⅡ-岩瀬遺跡-』秋田県教育委員会

利部修　1998「秋田県岩瀬遺跡における草創期の石器群」『列島の考古学-渡辺誠先生還暦記念論集-』pp.33-53　渡辺誠先生還暦記念論集刊行会

戸田哲也ほか　1999『神奈川県相模原市　田名塩田遺跡群Ⅰ発掘調査報告書』田名塩田遺跡群発掘調査団

永塚俊司　2001『新東京国際空港発掘調査報告書ＸＶ-天神峰最上（空港№64遺跡)-』　財団法人千葉県文化財センター

柳浦俊一ほか　2006『県道浜乃木湯町線（湯町工区）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　（第1分冊）　松才遺跡　真野谷Ⅱ遺跡　半坂古墓群　宮ノ前遺跡　正源寺遺跡』　島根県教育委員会

橋本勝雄　2008ａ「縄文時代草創期の局部磨製石鏃について-関東の資料を中心として-」『芹沢長介先生追悼　考古・民族・歴史学論叢』　pp.293-305　芹沢長介先生追悼論文集刊行会

橋本勝雄　2008ｂ「木葉形薄型尖頭器」雑考-縄文時代草創期における新たな器種の登場-」『石器に学ぶ』第10号　pp.123-138　石器に学ぶ会

橋本勝雄　2012「北方系細石刃石器群の研究」『シンポジウム北関東地方の細石刃文化　予稿集』　pp.2-12　岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会

橋本勝雄　2013 「縄文時代草創期の局部磨製尖頭器-「木葉形薄型尖頭器」の再検討-」『旧石器考古学』78　pp.45-61　旧石器文化談話会

「研究連絡誌」の刊行方針

1．本誌は千葉県教育振興財団文化財センター職員（専門職職員）の内部連絡誌であり、職員間の学問的交流を主な目的として刊行するものである。（刊行の趣旨は本誌第１号に詳述）

2．刊行は年１回とする。

3．各号４名～５名程度とする。

4．内容は、本県の考古学資料に関するもの、当センター調査例に関するものなど、広く考古学全般に関するものとする。

5．体　裁
（１）Ａ４版　横２段組
（２）本文　24字×44行
（３）Q数　13級

6．原稿枚数　挿図・写真等を含め、10ページ以内の分量とする。
但し、10ページを超える場合は、事前に編集担当者と協議する。

7．本誌は、文化財センター職員以外の方にも希望があれば無料（郵送の場合は実費負担）でお分けする。また、関係機関には別に定める配本計画に基づき送付する。

研究連絡誌　第75号

平成26年３月28日　発行

発　行　者　　公益財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター
〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809-2
電話（043）424-4848
URL／www.echiba.org

印　　刷　　株 式 会 社　エリート情報社［印刷出版局］
〒286-0134　千葉県成田市東和田415-10
電話（0476）24-7161